

令和5・6年度 第3回 横浜市救急業務検討委員会 会議録	
日 時	令和6年4月24日(水) 午後7時00分～午後8時00分
開 催 場 所	横浜市庁舎18階 会議室みなと6・7(横浜市中区本町6丁目50番地の10)
出 席 者	牛丸良子、小川憲章、越智登代子、北野菜穂、近藤和之、高井佳江子、戸塚武和、 平元周 (五十音順)
欠 席 者	竹内一郎
議 題	第18次報告(案)
議 事	<p>(事務局)</p> <p>定刻でございます。ただ今から、令和5・6年度第3回横浜市救急業務検討委員会を開催させていただきます。</p> <p>私は令和6年4月1日付け、横浜市職員の人事異動により、消防局救急企画課長を拝命いたしました、谷津と申します。</p> <p>本日進行を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>まずは、開催に先立ちまして、4月1日付け、横浜市職員の人事異動により、消防局救急部長に着任しました木村から、事務局を代表しまして御挨拶を申し上げます。</p> <p>(木村部長)</p> <p>4月1日付け消防局の人事異動により、救急部長に就任いたしました木村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>本日は大変お忙しい中、令和5・6年度 第3回横浜市救急業務検討委員会に御出席を賜り、厚くお礼申し上げます。</p> <p>また、平素より本市の救急行政の推進に御理解と御協力を賜り、この場をお借りして厚く感謝申し上げます。</p> <p>さて、皆様には、昨年度から「救急活動のDX」というテーマでご審議をいただき、本市による救急業務の今後のあり方について方向性を示していただいております。</p> <p>救急出場件数が過去最多を更新し続けておりますが、今年も三か月半の経過ですが、すでに6,400件以上増加しており、昨年同期と比較して約10%増えているという状況となっています。救急件数が過去最多を更新している中、現在行っている救急需要対策とはまた違った視点での対策として、重要なものと考えております。</p> <p>皆様のご意見は、年内には市長への提言として取りまとめ、公表させていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。</p> <p>委員の皆様におかれましては、様々な視点から忌憚りの無い御意見・御議論を賜りま</p>

すよう、お願い申し上げます。

簡単ですが、私からの挨拶とさせていただきます。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

(事務局)

続きまして、4月1日付け、横浜市職員の人事異動により、事務局として参加をしている職員にも一部異動がございましたので、着任した職員から御挨拶させていただきます。

まず、消防局です。

救急企画課救急需要対策・医療連携担当係長の、山本でございます。

救急指導課救急指導係長の、中畑でございます。

救急企画課担当係長の、金澤でございます。

続きまして、関係局として参加していただいております、医療局です。

地域医療部長の、大友でございます。

救急・災害医療課長の、鈴木でございます。

救急・災害医療課担当課長の、小松でございます。

また、アドバイザーとして参加していただいているデジタル統括本部です。

デジタル・デザイン室長の、洲崎でございます。

デジタル・デザイン室担当係長の椎名でございます。

以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、本日の会議の出席状況をお伝えさせていただきます。

本日の会議は、会場出席とWeb出席によるハイブリッド形式で開催となっております。

委員総数10名のうち、9名のご出席を頂いておりますので、横浜市救急業務検討委員会運営要綱第7条第2項の規定のとおり、半数以上の出席となり会議は成立しておりますことをご報告いたします。

なお、本委員会につきましては、横浜市救急業務検討委員会運営要綱第8条の規定により、原則公開となりますので、御了承お願いいたします。

また、議事録も後日、当局のWebページにて公開させていただきますので、併せて御了承をお願いいたします。

それでは、議事に入ります前に、本日の資料について、確認させていただきます。

資料は、上から順に次第、委員の皆様の名簿、座席表が各1枚、次に会議資料として、
資料1 「令和5・6年度 第2回 横浜市救急業務検討委員会 まとめ」
資料2 「横浜市救急業務検討委員会 第18次報告（案）」
となります。
不足等ございましたら、お申し付けください。

それでは、以降の議事進行につきましては、戸塚委員長にお願いをしたいと存じます。

戸塚委員長、よろしくお願いいたします。

(戸塚委員長)

皆さんこんばんは。委員長の戸塚でございます。

春暖というにはすこし寒い日が続いておりますが、明日からまた暖かくなるそうでございますので、ほっとしているところでございます。

それでは、次第に沿って議事進行を務めさせていただきます。

円滑な議事進行に御協力お願いします。

それでは、早速議事に入ります。

まず、2 報告事項

「令和5・6年度 第2回 横浜市救急業務検討委員会 まとめ」について、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

それでは、「令和5・6年度 第2回 横浜市救急業務検討委員会 まとめ」について、御説明させていただきます。

資料1をご覧ください。

開催日時は、令和6年2月5日の月曜日 午後7時から午後8時10分までです。

議題として、今回のテーマである「救急活動のDX」について、御検討いただきました。

3つの検討事項の中でいただいた、各委員からの主な意見は記載のとおりです。

以上が、令和5・6年度 第2回 横浜市救急業務検討委員会 まとめについての御説明になります。

(戸塚委員長)

ありがとうございました。

ただいま事務局から説明がありました。

資料1の「令和5・6年度 第2回 横浜市救急業務検討委員会 まとめ」について、訂正・御質問等がありますでしょうか。

御質問などないようですので、3の議題、「第18次報告（案）」について、事務局から説明をお願いします。

（事務局）

それでは、資料2「第18次報告（案）」をご覧ください。

前回、事務局からお示しさせていただいた、「提言の方向性」に御意見を頂き、その内容を受けて、第18次報告の案を作成させていただきました。

表紙をおめくりいただき、目次に沿って構成を説明いたします。

- ・ 1 ページ目の「はじめに」のあと
- ・ 2 ページ目に「現状の把握」
- ・ 5 ページ目から「救急を取り巻く現状」
- ・ 9 ページ目から「救急活動の課題」
- ・ 11 ページ目から「検討事項」
- ・ 12 ページ目から「検討の経過」

ここまではこれまでの開催の資料や検討の経過になりますので、詳細な御説明は割愛させていただきます。

次に14ページ目をご覧ください。ここからが報告書の中で重要となる提言の案になります。

今までの検討を踏まえてまとめたもので、市長への提言となりますので、全文を読ませていただきます。

1 救急活動のDXの推進と目的

救急活動の質を保ちつつ、増え続ける救急需要に対応するには、デジタル技術を駆使した救急業務の効率化により、救急医療の好循環を作り出し、より迅速・円滑な救急医療を提供することを目的とした、「救急活動のDX」を推進する必要がある。

一方、救急活動のDXを推進するにあたり、どのような形にするのか精査することは大事なことだが、市民、医療従事者、救急隊員の三者にメリットがあるものでなければならない。

救急業務の効率化により生み出された時間や人を、傷病者の観察や処置といった、

人にしかできないところに充てることにより、より一層の救急体制の充実を図るべきである。

2 DXの推進に向けて

(1) デジタル技術を利用した救急隊と医療機関との情報共有

救急隊と医療機関の情報共有をさらに効率化していく必要がある。

デジタル化を進めることにより、利便性を高めていくことは当然だが、蓄積されたデータを利活用し、新しい施策につなげていく必要がある。例えば、救急車を呼ぶような事態を未然に防ぐ予防救急の取組をこれまでとは違うアプローチで進めていくことや、早期の事後検証などによる救急隊員の質の向上を図ることなどが考えられる。

データの利活用には様々な方法があると考えられるため、集約したデータを基に課題を抽出し、解決していくといったプロセスを繰り返し実施していくことで様々な課題の解決を図っていくことが必要である。

(2) 適切な情報共有システムのあり方

システムの整備にあたっては、救急隊と医療機関が実際に利便性を感じられるよう、有用かつ普遍性(ふへんせい)のあるものにしていくことが重要である。

そのために医療機関や救急隊へのヒアリング、実証実験などを行い、真に必要なシステム構成やユーザビリティなどを確認し、実際の現場で使え、その恩恵を誰もが実感できるものにしていく必要がある。

これらを達成していくためには段階的な整備も考慮すべきであり、検討結果や時勢にあったシステムを導入後にも、新たな仕組みを柔軟に取り入れていく姿勢を持つことが大切である。

また、市民の医療情報という極めて重要な個人情報を取り扱うことになるため、利便性だけを求めるのではなく、高い安全性を保持できるものとし、さらには情報の取扱い等を明確にし、透明性を確保することが重要である。

そのほか、大地震や風水害といった自然災害時や停電によるシステム障害などによるシステム停止を考慮し、システムを介さなくても即座に対応できるよう、運用方法、現場の対応などを事前に取り決め、有事の際に混乱がないようにしておく必要がある。

(3) 国との連携のあり方

最後に、国との連携は欠くことができないため、状況に応じて柔軟な対応が取れるようにしておく必要がある。また、横浜市が取組みを進めていくうえで得られた知見を、国に対して要望という形で提示していくことも国との連携の一つとなり、救急業務の質の向上につながると考えられる。

何よりも横浜市の特性や医療体制等を鑑みて、優先的に行うべき事項を、常に市民目線で考えていくべきである。

デジタル分野は発展著しい分野であり、技術革新が今後も見込まれていくことから、世の中の動向を常に注視し、理解を深め、今後も適切な活用方法について検討しておくことも忘れてはならない。

以上が今回の提言になります。

最後に16ページに、まとめとして、

横浜市の救急出場件数は、年々増加傾向にあり、人口推計から予測すると、今後も増加が見込まれる。

このため、これまで取り組んできた救急隊の増隊や、予防救急の推進に加え、救急活動の効率化や更なる医療機関との連携強化が求められている。

今回は、限りある救急医療資源である救急隊と医療機関が効率的に連携し、本市の救急業務の円滑な推進と発展のため、救急活動のDXをテーマとして検討を行った。

今回提言した施策を実現させるため、消防局、医師会及び医療機関等関係機関が連携して、救急活動のDXを進めることにより、市民へより良い救急サービスが提供されることを期待する。

複雑・多様化する救急活動の対応に向け、今回の提言を具体的な施策として積極的に推進していくとともに、今後も、関係機関との連携を図りながら、救急業務における様々な課題について検討をしていく必要がある。その検討により新たな価値を生み出していくとともに、市民に信頼される救急業務の実現を目指してもらいたい。

と、記載させていただきました。

17ページ以降は、過去の提言と事業実績、令和5・6年度の当委員会開催状況と皆様の名簿になります。

資料2の説明は以上です。

(戸塚委員長)

ただいま事務局から説明がありました、「第18次報告の提言(案)」について、皆さ

んご意見等がありますでしょうか。

(平元委員)

文書としては素晴らしい文書だと思うのですが、実際に具体的にどういう風にするのか、例えば大地震や風水害といった自然災害時や停電によるシステム障害などによるシステム停止を考慮し、システムを介さなくても即座に対応できるよう、とありますが、具体的にどういうことをやろうとしているのですか。

(事務局)

災害時の対応につきましては市全体の防災計画にぶら下がっている、消防局細部計画等で取り決めがあるのですが、現時点では紙ベースで実施しているので、そういった医療機関との情報共有というところはあまり記載がありません。令和8年稼働に向けシステムを構築していきますので、本格運用にあたっては災害時にどのように運用していくかというのは、計画に落とししていく必要があると考えております。

いずれにしましても、システムの開発状況をみながら、どのような方法が良いのかというところを、本格運用までには決める必要があると考えております。

(平元委員)

救急隊と病院との、例えばスマホを使った連携だと、少なくとも停電時には自家発電がない病院はないわけですから、最初は紙ベースではなく、そのような連携ができると思います。救急隊のほうにもそのような電源があると思いますので、災害時にはすぐ紙ベースということではなく、スマホなどを使いながら、どうしていくかということを考えていかなければならないと思います。

(近藤委員)

提言の文書としてはよくまとまっていて、私のほうからはこのまま市長への提言としてよいと思います。

平元委員も仰っていましたが、ここからいかに実際の実証実験などを着実に進めて、着実な稼働を目指すのかということが一番大事だと思っておりますので、提言書に関しては、私は特に問題ないと思います。

本当にそこから下に落ちていく、いろいろな情報であったりとか、大切になると思っていますので、心してやっていただきたいなと思います。

(越智委員)

これまでの幅広い議論を端的にまとめられた提言だと拝見しているのですが、市民レベルでこの提言を見たときに、1の救急活動のDXの推進と目的というところはわかるのですが、では具体的な記載のある2と3はどうか？

3は国との連携でまだわからない部分が多いので漠とした書き方しかできないのかと思いますが、2のところ、実際横浜市としてどう推進していくように提言しているのかが、今一つ分かりにくく感じます。

その一つの原因としては見出しの立て方があると思います。

例えば「デジタル技術を利用した救急隊と医療機関との情報共有」という見出しですが、見出しというのは、次に来る文章の要約になっていると読みやすくなります。

(1)、(2)の見出しが、そういう意味では内容を読み手に伝えられるような形になっていないので、せっかくなさくさん書かれていることが、読み取りにくく残念です。

一つの方法として、私も本を書くときによくやるのですが、一番伝えたいことを小見出しにしていく、あるいは中の文章を段落ごとに箇条書きにするなど、工夫するとよりわかりやすいのかと思います。

あともう一つ、救急隊と医療機関の情報共有ということがしっかり書かれているのは、実証実験も医療機関のご協力ができないとできないとのことなので、とてもいいと思いますが、では実際に市民がDXの推進の中で、どのように位置づけられ、メリットがあるのかがこの提言からは読み取りにくいと思います。

例えば、市民から情報を得る場面での活用、救急現場での救急隊の聴取でのIT利用などがあると思うのですが、そうした表現がどこかに入っていると市民の方にもイメージしやすいと思います。

また、(2)の「実際の現場で使え、その恩恵を誰もが…」というところも、「誰もが」、より、「市民が」、とはっきり入れたほうが良いと思います。一般的にDXはまだまだ理解しにくいものですし、これから税金も継続的に使われる事業なので、市民も利便性を感じられるような、提言内容が見えるとより良いのかなと思いました。

(事務局)

見出しの部分につきましては、委員の仰るとおりですので、例えば、デジタル技術を利用した救急隊と医療機関との情報共有を図る、といったような、何をやるのかという形に工夫できればと考えております。

DXの目的については、最終的には市民の皆様が利便性を感じて、恩恵を受けられるというところが、一番重要なところですので、恩恵のところについては誰もが、ではなく市民の皆様が、のほうがより目的として表現できると考えておりますので、最終的には市民の皆様により良いシステムにしていくという形が良いかと考えております。

(北野委員)

まずは、このような御提言をまとめていただきありがとうございます。私はこのような横浜市様の会議に参加するのは初めてだったのですが、過去2回の内容をここまで密度濃くまとめてくださいましたことにつきまして、御礼申し上げます。

委員として参加させていただいた結果、アウトプットが提言になるという視点で、2つ、意見を申し上げさせていただきます。

提言となりますので、一つは短期的な、具体的なものも提言の中に落とし込みたいと思いましたが。それは平元委員やほかの委員の方が仰ってくださったような、もう少しわかりやすく、ここで話されたことが具体的に何になるのかという内容だと思えます。

横浜市様が、今回この3回の委員会の内容をもとに、救急DXの実証に入られると理解しております。実証する際に、何かしらシステムを使うことになると思うのですが、その際、この情報共有システムの、いわゆる必要要件や要件定義と呼んだりする部分、開発をゼロからしていく場合では無くても、実証の結果何を実現したいのかという具体の部分を経験的に落とし込むような、我々がここまでの委員会で話してきた。これは横浜市の救急DXで実現してほしいという具体的なものを、要件案として盛り込まれると、より直近的に、提言した結果が何に落とされるのかというところがわかりやすくなってよろしいのではないかと思います。

もう一点は長期的な目線でもう少し具体的なものが入るといいかなと思います。実際にはこの文書のあちこちにちりばめられてはいると思うのですが、2点あります。

まずこの実証をすることでデータが溜まると思えます。これはとても重要なことだと思っております。このシステムを使ってみた結果、データを溜めることだけではなくしっかりと使うこと。データを使うという意味は二つあり、よくデータ活用というのですが、利用と活用は違います。データ利用というのはあくまでも、庁内での利用の時に使われる言葉と理解しております。データ活用はどちらかというところよくオープンデータというような言い方で、第三者が使うことを活用と呼んでいます。

今回データ活用を行うのはなかなか難しいと思います。庁内でデータを利用していくということをしっかりとやっていくというような部分が、長期的目線で入られるとよいのではないかと思います。

私は医療従事者ではない立場で申し上げますが、この提言の中の最初に大事な部分があると思っております。私たち市民もニュースで見聞きしている医師の働き方改革にどう対応していくかということは、今回のこの事業に直結していることだと思えます。

そのためにもデータをどのように利用していくかというような文言を、例えば提言のところに具体的に入られるといいのではないかなと思います。

それから、2回目の委員会で、AIをどうするかという話があったと思いますが、AIを使うかどうかというよりも、データを使うということは人間が目視で分析するというのも一つなのですが、どこまでそれを機械に頼ることが出来るのかということは、是非横浜市様であるから試していただきたいと思っております。

それをこっそりやるということではなく、AIのような技術を使ってみるということについて、AI技術はまだまだ発展途上の技術なので、それを利用して経験値をためると、何が出来て、何が出来ないかが現場でお分かりになると思えます。市民は

そういう横浜市を応援する、エコシステムに持っていくというのがとても大事ではないかと思います。是非そういったような目線も提言に込めていただけたら嬉しく思います。特に今回DXというキーワードでしたので良いのかなと思いました。

コンピュータサイエンスの学術論文も最近では8割くらいがAIに関するものとなっています。まだまだAI研究は発展中な状態なので、だからこそ試してみるというフェーズにいらっしゃるかと思います。

恐らく想定どおりのことと想定外のことが出てくると思います。これはそういうものだと思います。是非、横浜市民の方に、サービス向上以外でもどういうことがなされようとして、どういう結果になったかというところまで、透明性の担保の話として、委員の提言として伴走できるというのではないかと思います。

(事務局)

まさに委員が仰るとおりでして、これから実証実験を行っていくところですが、皆さんからこれまでご議論いただいたところも議事録で拝見しておりますので、これから業者への発注等もありますので仕様をどこまで絞ってしまうことが可能かも含めて、可能な範囲で必要要件というようなところを案で記載できたらと思います。

長期的な視点で考えますと、2の(1)の部分が少し触れているところかと思えます。新たな価値の創造ということで、今回ご議論いただいた中で、実証実験していくわけですが、それで終わりではなく、技術というものは日進月歩で進んでいくものですので、そういった長期的な視点でどんどんチャレンジをしていくというようなことを提言の中に盛り込んでいけたらと考えております。

(松井副委員長)

こちらはとても忙しいので、じゃあこれちょっとやってみようかというような問題ではないと思います。絶対と思うようなものをやっていった結果、失敗してしまうことはあると思いますが、これが一番いいだろうというものをやるべきだと思います。試しにやってみましょうというようなゆっくりな問題ではないと思います。こちらは命が差し迫っていますから、できる限りいいものを入れる。違うことはありますが、試しにというようなことはまずいと思います。

(高井委員)

2の(1)のところで救急隊と出てくるのですが、これは車で行っている何人かを指していますよね。そこと医療機関の情報共有と書いてあるのですが、消防局の司令部とは情報共有しないのですか。当然そこの情報共有もあると思いますが、この文章だと現場だけの情報共有で、指令本部との共有は読み取れないと思います。救急隊の記載の中に司令部も含まれているのですか。

それから事故が起きるときというのは、ヒューマンエラーで起きると思います。デジタル技術を駆使した救急業務の効率化と書いてありますが、駆使できるだけの救

急隊員の訓練などの準備が非常に大事だと思います。システムがどんどん新しくなっていくのであれば、それに応じて研修させて間違いなくシステムが使えるようにしなければならないと思います。そういうことは前提なので提言に落とし込むかは別として、私はそこを心配してしまいます。システムはしっかりしたものが入っても、結局は人的ミスで事故が起きてしまうので、その2点が気になりました。

(事務局)

1点目の現場の救急隊と消防本部、主に司令センターとの情報共有になると思いますが、現時点でも指令システムと車載端末との共有はございます。あとは独自の無線等の通信網がありますので、そこでも共有が出来ているところです。

今回のDXのターゲットとしましては、現在一方通行の情報共有となっていますので、救急隊と医療機関との情報共有について、利便性を高めていこうというところにターゲットを絞っておりますので、こういった表現になっております。

ヒューマンエラーの件は、委員の仰るとおりでして、このDXのシステムの取扱いに限らず、消防局の命題といたしまして、職員の教育訓練というのはしっかりやっていく必要があると思っております。そのうえでも我々今年度、救急企画課と救急指導課という二課体制にいたしまして、システムを本格運用するにあたっては、救急指導課を中心といたしましてしっかりとトレーニングをしながらやっていくということでございます。

(小川委員)

いろいろ御意見出ていますが、救急活動のDX、一番の目的は現場で起こっている患者さんと救急隊の接触、そこで医療機関が待っている情報と救急隊が欲しい情報をいかに早く伝達するかということだと思いますが、具体的なことを提言に記載するのは難しいのかなと思いますので、これまでの委員会の中で出たように、今はカードに少し情報が入ったりしておりますので、そういうのをうまく使ったり、国が進めているような実証実験の結果に、横浜市がしっかりと乗るようなシステムを作っていくような方向で提言をまとめているのではないかと思いますので、もちろん医療機関、特に病院さんはDXが進めば効率化が進むし、情報も早く受け取れるし、返答も早くできると思いますので、しっかりやっていただければ、私医師会からきておりますが、よろしいのではないかと思います。

(牛丸委員)

皆様のご意見に重なるところもあると思いますが、入れていただきたいところの、効率的な記録だったり情報共有というところ、個人情報の安全性というところ、あとは一度構築したにとどまらず、新たな技術の革新だったり、問題が起きたりしたときは新たに構築するというところも中に入れていただいているので、内容的にはよいかと思います。

(平元委員)

最初のころの話し合いにあったと思いますが、救急隊が音声データで情報を入力する。入力したデータを医療機関に送って、断れたら同じデータを違う病院に送るということを行うのですよね。それを受け入れられるまで続けるということで、同じことを繰り返さなくてもいいというのは良いことだと思います。

DXで救急隊の滞在時間を短縮するということが出来れば良いと思います。

(戸塚委員長)

様々な御意見をいただきましたが、提言に最終的にどのように落とすかということに関しては、また事務局のほうと相談して、最終的なものにしたいと思います。

質問も出尽くしたようですので、本委員会の今後の進め方について、事務局お願いいたします。

(事務局)

さまざまな御意見を頂きありがとうございました。報告書の最終案については、ただいま頂いた意見を基に、事務局にて修正させていただいたのち、最終確認は委員長一任ということにさせていただきたいのですが、皆様いかがでしょうか。

<全員賛成>

(戸塚委員長)

ありがとうございます。

それでは、委員長に一任していただけるということですので、しっかりと確認させていただきたいと思います。そして、その結果は、事務局を通して皆様に御報告いたします。

次に次第の4「その他」ですが、委員の皆様から全体を通して何かありましたら、お願いします。

(平元委員)

私も何度かこの会に参加させていただいていますが、提言の言葉はとても素晴らしいものだと思います。ですが、例えば16次報告の救急隊以外の救急車を使って運ぶ話などは、まったく動いていないですよね。いかにも立派な提言がなされても、実際には何も動いていない。

また人生の最終段階にある傷病者をどうするかという問題ですが、今高齢者が自宅で心肺停止になるケースが結構あります。ところがいまだに心肺停止は三次救急に運ぶというようなルールのまま変わっていません。例えばうちの病院にかかりつけの患者さんが心肺停止になったときも、三次救急に運ばれます。三次救急というのは、その人の情報がないわけですから、全部警察対応になります。そして警察からう

ちに電話がかかってきて、そちらで診断書かけませんかというようなことになり、無駄な労力がかかっています。今の救急救命士ならしっかりと教育を受けているので、救えそうな人、心臓マッサージをしたり酸素を使用したりして脈が出るようなレベルであれば三次でいいと思いますが、そうではないケースは三次に運んでもしょうがないと思います。メディカルコントロールはいまだにそういうものは三次にという流れが変わっていませんよね。それをもう少しかかりつけの病院に搬送するというような流れにすることで、無駄な労力を減らすのも必要だと思います。

特に最近高齢者の死亡が多いので、そういったことをして無駄な労力を減らす必要があります。

今回の診療報酬の改定で、私も詳しくはわかりませんが、その日のうちに転送した場合点数がつくようになりました。病院間での移動が増えれば救急車が呼ばれることが増えてくるような気がしますので、心肺停止の患者の搬送など、労力をかけないことが大事になるかと思っています。

(松井副委員長)

DXというのは大事で、どんどん進んでいくし、どんどん取り入れなくてはならないと思いますが、現場としては何のデータもなくともやらなければならないことです。データは確かに重要ですが、データが無くともやらなければならない。データを集めていたら時間が経ってしまったということが無いように、これからもよろしくお願いいたします。

(平元委員)

過去の報告に#7119に関するものがあります。今後全県でやっていくということですが、最近#7119に電話すると、受診をしなさい、救急を呼びなさいという指示を受けることが多いです。電話に出た人がアンダートリアージにならないように少しオーバーにやっているという部分で、救急要請に繋がっている部分もあると思います。救急の件数を減らすためには、電話を受ける人の教育もしっかりやるべきだと思います。全県でやるということになってもしっかりと取り組んでいただければと思います。

(事務局)

過去も含めて、頂いた提言というのは、我々事務局に対して新たなチャレンジに向けて、強い後押しをしていただいているものだと思っております。頂いた提言をどれだけ良いものに仕上げていくのかというのが我々の責任だと思っておりますので、今回のDXについてはこれから走っていくわけですが、予防救急等々も含めまして、やはり提言を頂いて終わりではないと思っておりますので、引き続きより良いものを仕上げていく努力は、消防局としても続けていく決意を新たにしているところでございます。

(戸塚委員長)

ありがとうございました。

議題として予定していたものにつきましては、審議が終了しました。

それでは、事務局に進行を戻します。

この2年度に渡り、委員の皆様には多大な御協力を賜り、心からお礼を申し上げます。

(事務局)

戸塚委員長、議事進行ありがとうございました。

報告書の修正に関しては、委員長に御一任とのことで御承認いただきましたので、皆様にお集まりいただくのは、今回が最後となります。

今回の第18次報告の公表は6月を予定しております。

なお今回御議論いただいた救急活動のDXですが、今年度の実証実験を行い、令和7年に実証結果を基にシステム開発をし、令和8年の運用開始を目指しまして、しっかりと取り組んでまいります。

結びになります。事務局を代表しまして、救急部長の木村より御挨拶させていただきます。

(木村部長)

戸塚委員長、松井副委員長をはじめ、委員の皆様には、御多忙を極める中、1年間にわたり、夜分にもかかわらず、活発な御議論を頂き誠にありがとうございました。

この度の御提言に際しまして、御指導いただいた事項につきましては、今後修正・反映をしております。今後、医師会、病院協会の皆様の御協力を賜りながら、関係する部署とも連携し、提言の実現に向けしっかり取り組んで参ります。

皆様におかれましては、どうぞ、今後とも御支援、御協力を賜りますよう、お願いを申し上げます。

結びに、改めて、皆様に、この1年間の感謝を申し上げるとともに、今後も、御指導、ごべんたつを賜りますようお願いを申し上げ、簡単ではございますが、御礼の挨拶とさせていただきます。

誠にありがとうございました。

	<p>(事務局)</p> <p>それでは、以上をもちまして、令和5・6年度第3回横浜市救急業務検討委員会を終了させていただきます。</p> <p>本日はお忙しい中、またお足元が悪い中お集まりいただきまして、ありがとうございました。</p>
<p>資 料</p>	<p>資料1 令和5・6年度 第2回横浜市救急業務検討委員会 まとめ</p> <p>資料2 横浜市救急業務検討委員会第18次報告(案)</p>